

友ヶ島の漂着ゴミ回収

環境団体 注意喚起へ仕分け

大阪湾の海洋ゴミ問題の研究や改善に取り組む団体が15、16両日、和歌山市沖の無人島群・友ヶ島に漂着

したゴミを回収し、仕分ける作業を行った。今後、ゴミの流出元を特定したうえで、対象の自治体に注意を促すなどして、環境保全につなげるという。

団体は、大学教員や弁護士、友ヶ島の対岸の加太地域に住む住民の代表らでつくる一般社団法人「加太・

友ヶ島環境戦略研究会」。15日は市立松江小児童らと一緒に島に渡り、ゴミを回収。16日はゴミを市立加太中学校の体育館に持ち込み、分類した。

その結果、回収量は45袋入りの袋で約30袋分にもなった。北側の海岸には、ペットボトルや瓶、カンなど生活色の濃いものが多く、南側の海岸には、ブイなど大型ゴミが目立ったという。



友ヶ島に漂着したゴミの仕分けを行うメンバー(和歌山市立加太中学校で)

同会代表理事の千葉知世・大阪府立大准教授(環境政策学)は「海洋ゴミを減らすため、集めたデータを

友ヶ島漂着ごみ、解決を

小学生参加し現地調査

和歌山市の友ヶ島周辺に流れ着く海洋廃棄

物の問題解決に取り組み一般社団法人「加太



・友ヶ島環境戦略研究会」が15、16の両日、現地調査を開始した。友ヶ島の南北2カ所の海岸に5カ所四方の区画計6カ所を設けて、ごみを回収。月1回定例会

観測を続けてごみのデータを集め、大阪湾流域のごみ減量に結び付けたい考えだ。

同会の代表理事の千葉知世・大阪府立大准教授と地元住民らは2019年度に予備調査

を実施し、20年7月に同会を設立した。

9月15日には、和歌山市立松江小(同市松江北4)の5年生や花王グループ社員らが加わって、手分けしてごみを回収。総重量は100kg以上になった。16日には同市立加太中(同市加太)でペットボトルや瓶・缶などに分類した。

友ヶ島北側では、プラスチック片やライター

など小物の生活ごみが大量に見つかり、注射針もあった。海流の関係から大阪湾流域で投棄されたとみられる。一方、島の南側は外海に面しているため、漁具や中国語で書かれたペットボトル、発泡スチロールなど比較的大きなごみが目立った。

16日に作業を見学した加太中1年の伊賀良衣華さん(13)と山東亮太さん(12)は「ごみはきちんと管理しないといけないと思う。ビニール袋はなるべく使わないように意識したい」と話した。

千葉准教授は「大阪湾のごみ問題解決には、流域の住民や自治体、企業がそれぞれ役割を果たす必要がある。この調査のデータを共有し、みんなで考える場をつくってほしい」と話した。

【新宮産】